

片峰学長が語る 明日の長崎大学

いよいよ、新年度がスタート!先が見えない時代と言われるなか
片峰学長は長崎大学をどのような未来へ導こうとしているのでしょうか。
新入生へ贈る言葉とともに、本学のいまとこれからについて、語っていただきました。



改革への道遠し!?

大学が法人化されてから5年目に学長就任。この2年半、意外に早く過ぎました。「志と覇氣にあふれた若者が集う大学」、「世界に突出する大学」、「個性の際立つ地方総合大学」の3つの目標を掲げ、大学の改革を行ってきましたが、まだまだ道半ばで、道遠しといったところです。

本来なら、法人化により大学の運営は自由度が拡大され、努力次第で、教育・研究がどんな活性化されて、教職員が元気になる、それが学生たちにも反映されるはずでした。しかし、現実には、教職員は従来の教育・研究以外の業務量(評価業務や競争的資金獲得のための申請書作成など)が格段に増え、疲弊していた。私は、ここをまず何とかしなければと、組織や業務を見直し、効率化を図ってきました。

大学病院が、いい方向へ

大学病院を例にお話ししましょう。大学にとって大きな収入源でもある大学病院では、

当時、臨床の先生方は、教育・研究の時間を診療業務に割かれ、論文を書く時間もなく、たいへん疲れきっていました。そこで、まず、組織改革を行い、「長崎大学医学部歯学部附属病院」から「長崎大学病院」にしました。つまり、学部からはずし、大学直轄の病院にすることで、経営にある程度自由度を持たせ、営業力を付け、収入を上げることができるようにしたのです。そして、収益は病院のスタッフの増員や設備の充実、そして将来のために投資できるしくみをつくるなど、どんどん効率化を図りました。すると改革から2年で、2割の増収という、うれしい成果が出ました。これは、病院長である河野茂教授の強力なリーダーシップのおかげでもあります。

また、患者さんに対して、よりこまやかな配慮が行き届くようになるなど、サービス面も大きく向上しました。医師の数も増え、少しずつ余裕が生まれています。そうすれば今後、研究を頑張ろうという人も出てくるはず。もちろん、病院のスタッフはまだまだたいへんですが、いま非常にいい方向に行っていると思います。

期待以上の若手研究者

改革の成果が見えはじめてきたものは、ほかにもあります。たとえば、テニシア・トラック教員たちの活躍です。3年前、齋藤寛前学長のとき、長崎大学は、テニシア・トラック制度を導入しました。彼らは期待どおりの、あるいは期待以上の研究成果をあげてくれています。彼らの存在は、周囲にもいい影響を与えています。あの頃、種をまいたものが、いま芽を出しているという印象です。

■グローバルCOEプログラム

大学院レベルの研究拠点において、世界最高水準の研究基盤の下で世界をリードする創造的な人材育成を図るため、国際的に卓越した教育研究拠点の形成を重点的に支援する文部科学省の事業。全国の大学から多くの研究テーマの申請があるなかから、厳しい審査を経て採択される。

長崎大学は現在、2本が採択され、世界的な研究拠点としての充実を図っている。

熱帯病・新興感染症の地球規模統合制御戦略(平成20年度採択)

人類の脅威となっている主要な感染症の制御と克服をめざす研究拠点。ケニアやベトナムなど海外研究拠点と連携し、フィールドワーク、臨床研究を進め、同時に人材育成にも力を注いでいる。

放射線健康リスク制御国際戦略拠点(平成19年度採択)

放射線が人に与える健康リスクを地球規模で究明。放射線の負の遺産を克服する方策をうち立て、人類の安全と安心に寄与するための科学的基盤の確立をめざす。放射線健康リスク制御に資する国内外の多様な人材育成も行っている。

世界に突出する 研究拠点へ

世界的な研究・教育拠点の確立をめざしている本学には熱帯医学研究所と、医歯薬学総合研究科附属原爆後障害医療研究施設という誇れる研究所があります。齋藤前学長時代には、それぞれ熱帯病・新興感染症と、放射線医療科学でグローバルCOEにも採択されるなどしました。その2本柱に加え、さらに、環東シナ海海洋資源環境研究センターという国際性の高い研究拠点が3本目の柱として加わり充実を図ってきました。

そして、昨年、「日中韓の大学間連携による水環境技術者育成」というプロジェクトが文部科学省の事業に採択され、工学研究科で動き出しています。経済の中心が東アジアへ移ろうとしているなか、日中韓の枠組みは、たいへん注目されています。これは大きな動きのひとつだと思います。

アフリカで

活動拡大!

本学は、海外のいろいろなところに研究拠点を持っています。大きなところでは、ケニアとベトナムに感染症の拠点、そしてベラルーシに放射線医療の拠点があります。

その中で、「ケニア拠点」が、「長崎大学アフリカ拠点」として新たに動き出しています。ここでは、これまで同様、熱帯医学の研究拠点であるのですが、そこに歯学部活動が加わるようになっていきます。



アフリカには歯科医がたいへん少なく、ケニア一国でも200人ほどしかないと言われています。そこで、現地の方々の歯の状態を診たり、骨格などの調査・研究を考えています。この活動は、熱帯医学研究所が長年培ってきたコホート研究（追跡調査研究）により把握している地区の住民の方たちからスタートします。歯科の分野からのアプローチは、いままでも誰もやっておらず、現地の方たちに非常に貢献できると考えています。

また、アフリカでの研究活動には、さらに、水産学部も加わる予定です。ケニアの内陸部には、ビクトリア湖という大きな淡水湖があります。そこは、大切な漁場で、現地の人たちの生活の糧です。しかし、近年、湖にヨーロッパの魚が持ち込まれるなどして生態系が乱れつつあります。水産学部が、そこに何かしら貢献できるかもしれないと考えています。さらには、インド洋も含めた研究活動を検討しています。

おそらく、アフリカをまじめにやっている大学って、そうありません。今後の頑張り次第では、いろんな形で、注目されてくると思います。

キャンパスを 国際化します!

今後、本学がめざしていくもののひとつが、キャンパスの国際化です。これは、世の中が国際化の大きな流れのなかで、全国の大学がやろうとしていることでもありません。具体的には、留学生をもっと増やし、外国人の教員も増やしていきます。いま、長崎大学にいる留学生は学生全体の4%で、約400人しかいません。まずは、1000人をめざしたいと思っています。

キャンパスの国際化は、日本の学生に、語学力の向上や、国際的なセンスを養うという面で大きな影響を与えるでしょう。なかでも、留学生たちのハングリーさやアグレッシブさ、こういった面の刺激を受けてほしい。これは、国際化の最大の目的のひとつでもあります。日本の若者たちは礼儀正しいのは良いのですが、おくての人が多い。もっと、ガツガツしていると思います。

また、大学の国際化を通して、地域の国際化、あるいは、観光客の誘致などにもつながれば良いと思っています。

欠けているもの

今年1月公に発表した新学部設立について、順を追ってお話しします。まず、私はどうしたら本学が21世紀に持続可能で、世界に光を放てる総合大学としてやっていくことができるか、ということはずっと考えてきました。そのキーワードのひとつが「総合大学」です。

長崎大学は、1949年、戦前の長崎医

■長崎大学アフリカ拠点

昨春秋、KEMRI(ケニア中央医学研究所)に隣接する場所に、「長崎大学アフリカ拠点」が設けられた。これまで「ケニア拠点」として「KEMRI」の敷地の中に研究拠点を置き、熱帯医学研究所のスタッフを中心に10人規模が常駐して研究を続けていたもの。これまでの感染症の研究をはじめ歯学部、水産学部も加わっての新たな展開がはじまる。



■日中韓の大学間連携による水環境技術者育成

中国、韓国の留学生を受け入れ、長崎大学で4年間かけて、水環境の保全と持続的利用に関する問題解決に貢献できる、高度専門技術者を育成技術者として育成する事業。文部科学省が創設した「日中韓等の大学間交流を通じた高度専門職業人育成事業」の一貫で、採択されたもの。この人材育成を通して、将来、東アジアの環境への貢献が期待されている。



科大学、長崎高等商業学校、長崎師範学校など、いくつかの専門学校が合体してできました。そして、医科大学は医学部、高商は経済学部、長崎師範は教育学部になった。その後、ずっとその単科教育機関の機能が学部の形で継承され、学部はあったが、長崎大学という実態はほとんどなかったのです。それで、法人化を機に、本当に総合大学としてやっていける体制をつくらなければ、ということになりましたが、現実にはたくさん、欠けているものがあつたのです。そのひとつが、理念です。

このことについて、慶応義塾大学の安西前塾長は、「法人化後も東大を含め、全国の国立大学は全然、個性が見えない」と指摘された。「なぜ、個性がないのか。それぞれ、個性を醸し出すような教育理念がないのだ」と指摘されました。慶応義塾大学は「自立自尊」という、確固たる教育理念をどの学部も共有しています。私は、全教職員や学生が共有できる教育理念を確立し、知の集合体ではなく、知の共同体として進まなければならぬ、ということを再認識させられました。

そこで、長崎大学のすべての学部が共有できる教育理念をつくりました。今後、これをきちんと普及させていきたい。

文系の新学部設立へ

そして、もうひとつ。本学の成り立ちに起因して、決定的に欠落している部分があります。それは、文学部、法学部、社会学部、理学部といった、基本的な学問をする学部がないということです。これを何とか補填したい。

また、いま、全国的に教養教育が崩壊しているといわれていますが、その教養教育を立て直していくという観点からも、人を育てる学問の基本とする新学部をつくりたいという発想が出てくるわけです。

文系の新学部を考えていますが、これは、長崎大学の悲願でもあり、ぜひ、実現したい。ただ、国からの補助を望めない時代にあつて、学生や教員の定員を自分たちで何とかしなければなりません。そこで、どうするかという話になるわけです。

課題を抱えています

つまり、既存の学部の改革にも関連して行くということですが、いま、課題を抱えている学部があります。たとえば、教育学部。教員養成学部でありながら、卒業生の教員就職率が6割しかありません。しかもその半数は臨時採用者なのです。実は、こうした現象は、全国の大学の教育学部で起こっています。理由は、子どもの数が減っていることもありますが、もっと大きなファクターは、教育養成系学部以外

の学部や、私立大から、どんどん教員の就職に入り込んできていることがあります。こは、何か手だてが必要です。育てる人材像を特化して、定員もスリム化するというのが、ひとつの考え方だろうと思つています。

また、経済学部にも課題があります。約400人の学生を抱えています。県内をはじめ、近隣各県の大学にも大きな定員数の経済学部があることからしても、やはり定員が多すぎます。長崎高商時代は、経済界で活躍されている多くの人材を輩出しました。しかし、その頃とは、全く社会の状況が違います。ここも大改革をして、魅力のある経済学部に生まれ変わる必要があります。

いま、こうした課題を抱える学部のことも含め、新学部設立に向けて検討を続けているところです。

トップをめざせ!

大学には、それぞれの学問領域があつて、それぞれ専門の先生がいます。それぞれが高いレベルで、切磋琢磨してほしいと考えています。同時に、連携もして、世の中に、おつと、いわゆるような研究をする。医と工が連携するなど、いろいろな組み合わせのなかでそうしたものが生まれてくるはず。そうした考えの先に、今回の工学部や生産科学研究科の改組があつたわけです。新しくスタートした工学研究科には、毎年の学生定員5人を、5年1貫コースで育てる「グリーンシステム創成科学専攻」があります。これは、まさに、長崎からトップレベルの研究者を育てようというものです。



■学部が共有できる教育理念

「全学共有学士像」として4項目つくられた。

地球と地域社会及び将来世代に貢献する志を有する

環境や多様性の意義が認識できる

自ら学び、考え、主張し、行動変革できる素養を有する

研究者や専門職業人として基礎的知識を有する

キーワードは、「多様性」

最近、地域の方々から、「長崎大学は変わりましたね」と言っていたり、いろいろになりました。その最大の理由のひとつは、広報戦略本部を通して、大学からいろいろな情報を発信し、地域の人も巻き込んだ催しをするようになったからだと考えています。

しかし、実は、地域貢献については就任当初はそれほど真剣には考えていませんでした。やはり、大学の教育研究を、活性化して高度化するのが第一で、そうした中から地域の産業と結びつくことで貢献できればと考えていたのです。しかし、世の中が大きく動くなかで、大学での人材育成の意味とか、地域にある大学の役割などに関して、市民の皆さんに情報を発信する必要性を強く感じるようになったのです。

同時に、地方総合大学として、地域の人たちが本望に望んでいるものをきちんと受け止める必要があると。なぜなら、日本の勢いがこれだけ落ちてくると、地域はもつとたいへんな状況になるわけです。ですから、地域のひとと一緒に考え、議論し、学んでいかなければならないと考えるようになりました。そういう意味で、昨年の寺島氏監修によるリレー講座は、多くの市民の方のいろいろな意見を聞く素晴らしい機会になったと思っています。

私は、日本のいまの状況を突破するキーワードは「多様性」しかないと思っています。多様な発想、多様な人材の頑張りから、ブレイクスルーのヒントが出てくるのです。そして、その発信地こそが、地方であると思っています。



実は、裏が表かも

学長室には以前から、通常の日本地図を上逆に描いた地図が貼ってあります。私はその意味合いをずっと考えていたのですが、あるとき、寺島氏の話聞いて、解けたと思ったことがあります。

寺島氏は、通常の日本地図は、日本を真ん中に描いているが、米国大陸側を向いた太平洋側が表日本であり、日本海側が裏日本で、やはり米国を中心に考えたものであるというようなことをおっしゃった。そして、日本の近代化は150年前、米国が黒船でやってきたことからはじまり、戦後にしても、ずっと米国の影響を受けながらきたと多くの人が思っている。しかし、実は、黒船がやってくる遙か前から、日本列島にはいろいろな形で海外からの影響があった。たとえば、鎖国時代のオランダとの交流、もちろん朝鮮半島経由で、大陸とも古くからいろいろな交流があったのです。世界の構造転換のなかで、文明や経済の中心はいま、中国をはじめとした東ア

ジアに移ろうとしているが、そしたらもう、日本海側や東シナ海側が表じゃないかという話でした。

この地図をそういう目で見たら、面白いのです。また、長崎が中国に本当に近いことも実感します。長崎の地勢学的な位置が見えてくるのです。

「核兵器廃絶」を発信します

被爆地の大学として問題意識がずっとありながら、本学が真正面からきちんと取り組んでいけないものがあります。それは、「核兵器廃絶」です。かつては、「核兵器廃絶」とか「平和」と、左翼思想とも言われた時代がありました。しかし、今や「核兵器廃絶」の願いは世界共通のものになっています。それにも関わらず本学は、まだ何の一言も発信していません。

現在、非政府組織(NGO)の委員長として、核兵器廃絶の活動をされている、土山秀夫元長崎大学長が、かつて、こんなことをおっしゃっています。「被爆者の皆さんたちを中心に、「感性」に基づく運動というのは、長崎にはずっとありましたが、「論理」に基づく運動というのが、少し欠けていたのではないのでしょうか」と。そして、その大きな責任は大学にあるとも。

本学はこれまで、人道的な観点から、被爆者の治療や、その後障害を研究するなど、被爆者医療に力を注ぎ貢献してきました。しかし、国際政治の中で、原爆を落とされた長崎の歴史的な意味を、きちんと発信することをやってこなかったのです。

■「もしドラ」

『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「マネジメント」を読んだら』(岩崎夏海 著/ダイヤモンド社)。野球部の女子マネージャーが、経営学者ドラッカーの著書「マネジメント」を読み、その経営理論で野球部を改革していく青春ストーリー。小学生からお年寄りまで幅広い年代層に読まれているという。



■寺島実郎氏の監修によるリレー講座

昨春秋、「世界の構造転換と日本の進路」をテーマに、寺島実郎氏の監修のもとで行った本学主催の講座。沈才彬氏(多摩大学経営情報学部教授)、坂本和一氏(立命館大学名誉教授、立命館アジア太平洋大学初代学長)、伊勢崎賢治氏(東京外語大学大学院総合国際学研究院・教授)、中村桂子氏(JT生命誌研究館 館長)、村上憲郎氏(グーグル株式会社名誉会長)、

財部誠一氏(経済ジャーナリスト)など、日本の知のリーダーを招いて講演を行った。

本学の教職員や学生だけでなく、多くの市民も参加し、「市民の皆さんが、これからの日本や世界の行方がどうなるのかを、とても知りたがっている、そのなかで、長崎のことを考えようとしていることが、ものすごく伝わってきた」と片峰学長は感想を述べている。

それは、なぜか。このことは、学問領域としては社会科学の役割なのですが、いままで長崎大学に、しっかりとした「論理」を発信できる法律、政治、文学といった分野の教員集団がいなかったということがあります。これが、また、新学部の話にもつながることになるわけですが、それと同時に、その問題に中心的に取り組む「核兵器廃絶研究センター」をできるだけ早く立ち上げたいと考えています。

「核兵器廃絶研究センター」は、純粋に、「核兵器廃絶」に特化したセンターにするつもりですが、この問題を考えるとき、核の「平和」利用についての整合性を学問的にきちっとつけないと、進めないところがあります。そういうところまで含めて、「核兵器廃絶」を長崎の立場で主張したいと考えています。

いま、大きな問題は、被爆者はどんどん高齢化して、近い将来いなくなってしまうということです。「感性」の問題として継承する市民運動の部分も当然必要です。そして、本学は「論理」のところを、創造して発信していく。いまのうちに、やらなければなりません。

「もしドラ」を 読まねば!

新人生をはじめ学生たちにぜひ、読んでもらいたい一冊があります。いま話題の「もしドラ」です。その本を通して、ドラッカーが提唱する言葉が印象的です。それは、「イノベーション」。変革する、新しい価値観を創造する、といった意味ですが、ドラッカーは、新しいものをつくり上げるといふより、いかに用済み

になった古いものを捨て去ることができなくなるか、大事で、それがイノベーションの最大の戦略であると云っています。

これだけ世界も日本も行き詰まり、誰も解決策をきちんと提示することができずにいるなかで、世界は確実に変わってきています。文明の中心は、東アジアへ。そして経済の中心も先進国ではなく、中国、ブラジル、インドなどの人口大国になろうとしています。その変化のなかで、環境や食料などいろいろな問題がいまから押し寄せてきます。そこに「イノベーション」がなければ、おそらく私たちの未来はありません。

古くなった衣を脱げば、そこから何か新しい感性が生まれます。昔ながらの国立大学のシステムの中で、ある意味、安穩としていたような時代の感性や、日本が豊かだった頃の常識は捨て去らないといけません。しかし、現実にはそう簡単にはいかないようです。私の要求は、極端なのかもしれませんが。

結論は、100年後の 人が出す

いま、世の中は、「グローバル化」「イノベーション」をキーワードに展開しようとしています。それが、日本人にとって、良いことなのか、どうか、私個人としてはまだ結論は出ておらず、実は日本人の壮大な実験だと思っるところがあります。これは、おそらく100年後の人が結論を出すことではないでしょうか。私は学長として、いまそれをやらざるを得ない時期だと思っていますし、チャレンジしないと、その先もないと思っています。

他人の言うことを 信じるな!?

学生たちには、好奇心を持って、何にでもチャレンジするような気概を持ってほしい。これほど変化の激しい時代にあって、いまやインターネットの「academic」などが世界を動かすと言われていますが、やはり、他人が言うことを安易に信じず、自分の目で見て、自分の頭で考えることが大切なのではないでしょうか。いま、本当に何が起きているのかを、自分の頭の中で想像したり、書物などで学んだり、知っている人に聞いたり、そういうアクティブで前向きな態度が大切です。そして、世界、あるいは日本、地域、家族のなかで、自分がやるべきことは何なのかを、見つけてほしいですね。ひいては、自分自身で決断し、実行する人になる。そのためにも、総合的な人間力を培ってほしいと思います。

■ 学生に読んでほしい、学長おすすめの図書

『されどわれらが日々 (新装版)』	柴田 翔(文藝春秋)
『遠き落日 上・下巻』	渡辺 淳一(集英社)
『世界を知る力』	寺島 実郎(PHP研究所)
『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「マネジメント」を読んだら』	岩崎 夏海(ダイヤモンド社)
『マネジメント 基本と原則(エッセンシャル版)』	P.F.ドラッカー(ダイヤモンド社)
『20歳のときに知っておきたかったこと スタンフォード大学集中講義』	ティナ・シーリグ(阪急コミュニケーションズ)

『日本辺境論』	内田 樹(新潮社)
『生物と無生物のあいだ』	福岡 伸一(講談社)
『クラゲに学ぶ ノーベル賞への道』	下村 脩(長崎文献社)
『ハイチいのちの闘い 日本人医師の300日』	山本 太郎(昭和堂)
『新型インフルエンザ 世界がふるえる日』	山本 太郎(岩波書店)

※上記の図書は、長崎大学附属図書館中央図書館の企画コーナーにしばらく展示しています(9月頃まで)。ぜひ、ご利用ください。